

リスク管理

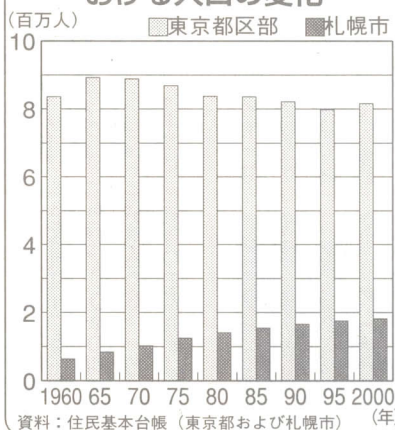
都市に人が移住した都市一世の段階において、都市は主として働く場であり、生活は従または仮であった。憩いと安らぎの生活空間は、出郷した田舎(家郷)にある。通常時は家郷への仕送りを行うが、失意、病氣・失業・災害などのリスクに対しては、多くの人々が家郷をあてにした。つまり、地方は都市経済の恩恵を受ける代わりに、都市生活面でのリスクを解消する「都市―地方相互依存システム」の仕組みが出来上がっていた。しかし、都市で生まれ育った都市二世や三世には、これらの都市―地方相互依存システムを活用できる田舎や故郷がない。精神的な疲れを癒す美しい山、川、海、緑が、そして、失業時に寄寓できる広い家を持っていない。深夜

リスクマネジメント

ABC

都市化と家郷喪失

東京都区部と札幌市における人口の変化



の盛り場が集まる若者達。家庭内暴力や自殺。都市自身が生活病理を解消する必要が出てきた。



都市一世にとつての家郷は、こころの原風景であり、都市生活のストレスで緊張し伸び切った精神・こころを癒し、再び伸びやかで張りのある都市生活を送ることの出来る場所である。お盆や正

月の帰省は、途中の混雑で肉体的に疲れても、精神的に健全な都市生活を送るために必要な行事である。自動車ハンドルの「あそび」やショックアブソーバなどと同様に、家郷の提供する自然や人間関係は、都市生活に必要な緩衝・癒し機能である。しかし、都市二世や三世にとっては、都市の中で、その機能を提供で

きる場所が必要となる。特に、都市三世以降の世代には、都市二世の経験した田舎がない。こころは、都市生活で完全に閉じたものとなり、緩衝・癒し機能が不足すること、外向きには暴走族や学校崩壊、内向きには自殺、殺人などの病理現象が発生して来る。

は、都市で解消する時代となり、積極的に緩衝・癒し機能を構築していく必要がある。家郷を喪失した都市生活者に提供できる緩衝・癒し機能としては、公園、河川などでの人工的自然の回復がある。都心の人口減少地区では学校などの公共施設の余剰地を緑化空間として整備したり、都心周辺の河川では鯉を放流するなどの事業を進めることで、こころの癒し空間が拡大するとともに、ヒートアイランド対策、環境学習対策などにもなる。更には、これらの自然環境は住宅地の優良化に反映することで、人口戻入や地域の資産価値向上にも貢献することになる。都市における原風景の創造が求められている。

生活病理、解消する空間を

（日本総合研究所）